

横浜港とセルロイド玩具

横浜港

1939年(昭和14年)のクリスマスイブ、一つの条約が廃止されました。その名前は「日米通商航海条約」。社会科の時間に必ず学ぶ日米修好通商条約です。

この条約につきましては次のように学ばれたのではないのでしょうか。

1858年(安政5年)、時の大老井伊直弼はアメリカを皮切りにイギリス、ロシア、オランダ、フランスと条約を結んだ。安政の五ヶ国条約と言われるこの条約は、五ヶ国側に領事裁判権を認める、日本には関税自主権がないといった不平等条約であった。また朝廷の勅許を得ることなく独断で結んだものであった。これに怒った尊王攘夷を唱える水戸藩の脱藩浪士達は、万延元年三月三日(1860年3月24日)江戸城桜田門外で井伊直弼を暗殺するに至った。

実は、これ殆どが事実と異なるのです。先ず領事裁判権を認めていたのは居留地の中だけで、一步でも外に出ると日本の法律が適用されました。外国人が住むことが出来るのは居留地の中だけで、外交官以外の旅行は一泊二日までしか認められませんでした。関税自主権が無かったのは逆に幸いしました。適切な関税のおかげで貿易が急増しました。朝廷の勅許なしで結ぶのもやむなしと主張した老中、大目付、目付といった幕府首脳に対して誰よりも強く勅許を得るべしと主張したのが井伊直弼です。そのため使節を送ったのですが「格が低い」「前例がない」などと言って朝廷側が会おうしませんでした。その間にも時間が経って行ってしまい、このままでは五ヶ国側の要求が、そのまま通ってしまうと判断して結んだ条約です。桜田門外で襲撃した水戸浪士達は条約の内容も知らず、尊王攘夷論も唱えていません。万延と改元されたのは事件後の三月十八日ですから、三月三日は安政七年です。

とにかくこの条約によって横浜が開港しました。当時横浜港がどれほど重要であったかは下の表を見れば分かります。

表1 各港貿易比率(%)

年次	輸出				輸入			
	横浜	長崎	箱館	全国	横浜	長崎	箱館	全国
1859	44.48	45.38	9.74	100.0	24.87	73.00	2.13	100.0
1860	83.89	12.73	3.38	100.0	57.01	42.20	0.79	100.0
1861	70.85	26.42	2.73	100.0	63.19	35.11	1.69	100.0
1862	79.63	18.19	2.19	100.0	72.93	26.79	0.27	100.0

1863	86.45	11.37	2.18	100.0	59.70	39.81	0.49	100.0
1864	85.10	10.97	3.92	100.0	68.54	29.75	1.71	100.0
1865	94.47	3.03	2.50	100.0	86.85	12.26	0.88	100.0
1866	84.85	12.01	3.14	100.0	74.41	25.39	0.20	100.0
1867	80.08	14.65	5.27	100.0	68.79	30.20	1.01	100.0

このように横浜港が圧倒的です。特に輸出は多い年には9割を超えています。では、横浜港からどのようなものを輸出していたのでしょうか。一位は、もちろん生糸ですが、どれくらい輸出していたのでしょうか。

図 1. 生糸



表 2. 生糸輸出の各港別比率(%)

年度	数量				金額			
	横浜	長崎	箱館	合計	横浜	長崎	箱館	合計
1863	98.43	1.57		100.00	99.13	0.87		100.0
1864	99.05	0.53	0.41	100.00	99.40	0.32	0.28	100.0
1865	99.08	0.32	0.60	100.00	99.58	0.09	0.33	100.0
1866	99.19	0.81		100.00	99.27	0.73		100.0
1867	96.96	3.04		100.00	98.36	1.64		100.0

こちらも横浜が圧倒的なのが見えます。このように横浜から生糸が輸出されていったのですが、ここで日本側の商人がとんでもないことをやりました。生糸は100斤(60kg)が一単位で紙を使って生糸を結わえています。その重さは約2.5斤(1.5kg)ですが、石灰や砂を塗ったり糸を太くしたり紙を厚くしたりした重量を増やしました。また外側だけ優良品をつけて内側に二級品をつけるようなことも行いました。

先ほど商人は一泊二日までしか旅行が出来ないと書きましたが、それでは産地まで行って品物を直接確認することが出来ません。そのため重量は飛脚が届ける注文伝票通りではあるが質は落ちる品物を売りつけていたのです。

このようにしてみれば安政の五ヶ国条約は、現在の日米地位協定などと違って日本側のほうこそ利益を得るという逆不平等条約だったのです。

横浜港の輸出入品がどのように推移していったかを10年毎に見ていくことといたしましょう。

表 3. 横浜港輸出入品目変遷

(金額:1860~1880 は万ドル、以降は百万円)

年次	輸出			輸入		
	品名	金額	構成比%	品名	金額	構成比%

1860 (安政 7 年, 万円元年)	生糸	259	65.6	絹織物	50	52.8
	油	31	7.8	毛織物	37	39.5
	茶	22	5.5	薬品	2	1.9
	銅類	21	5.3	亜鉛	1	1.2
	種子	12	3.0	蘇木	1	1.2
	計	395	100.0	計	95	100.0

1870 (明治 3 年)	生糸	458	40.4	米	1,063	45.4
	蚕卵紙	347	30.6	綿糸	354	15.1
	茶	269	23.8	綿織物	229	9.8
	繭	10	0.9	砂糖	198	8.4
	真綿	8	0.7	毛織物	92	3.9
	計	1,133	100.0	計	2,343	100.0

1880 (明治 13 年)	生糸	861	46.3	綿糸	722	27.4
	茶	473	25.4	綿織物	385	14.6
	蚕卵紙	99	5.3	砂糖	273	10.4
	屑糸	68	3.7	毛織物	231	8.8
	熨斗糸	61	3.3	綿毛織物	133	5.0
	計	1,858	100.0	計	2,634	100.0

1890 (明治 23 年)	生糸	14	42.3	綿糸	6	13.8
	茶	4	11.2	砂糖	5	13.0
	銅類	3	9.4	米	5	11.6
	絹手巾	2	7.7	毛織物	4	9.7
	熨斗糸	1	4.4	機械類	3	7.4
	計	32	100.0	計	41	100.0

1900 (明治 33 年)	生糸	45	46.9	鉄類	14	12.4
	羽二重	17	18.1	砂糖	13	11.9
	銅類	5	5.6	毛織物	9	8.4
	屑糸	5	5.2	綿織物	9	8.0
	絹手巾	4	4.5	機械類	8	6.9
	計	95	100.0	計	110	100.0

1910 (明治 43 年)	生糸	130	57.8	繰り綿	24	15.6
	羽二重	28	12.6	鉄類	16	10.3

	銅類	7	3.1	薬品	12	7.6
	屑糸	7	2.4	羊毛	10	6.3
	絹手巾	5	2.1	機械類	9	6.1
	計	225	100.0	計	154	100.0

1920 (大正 9 年)	生糸	383	49.9	繰り綿	103	14.5
	羽二重	85	11.1	鉄板	49	6.9
	縮綿	22	2.9	羊毛	43	6.1
	屑糸	15	2.0	油槽	42	5.9
	玩具	12	1.6	形鋼	27	3.8
	計	766	100.0	計	710	100.0

1930 (昭和 5 年)	生糸	291	64.6	生糸	26	6.7
	カ二缶	13	2.9	小麦	26	6.6
	小麦粉	12	2.7	繰り綿	25	6.5
	縮綿	9	2.1	木材	16	4.2
	羽二重	8	1.9	鉱油	15	3.9
	計	450	100.0	計	393	100.0

1940 (昭和 15 年)	生糸	331	34.5	鉄	122	11.1
	機械類	86	8.9	原油・重油	95	8.7
	自動車・部品	34	3.5	銅	94	8.6
	小麦粉	32	3.3	金属・木工機械	70	6.4
	鉄	29	3.0	米	61	5.6
	計	960	100.0	計	1,097	100.0

1950 (昭和 25 年)	生糸	9,475	14.4	小麦	17,756	27.5
	鉄類	7,124	10.8	石油	5,162	8.0
	銅	4,886	7.4	砂糖	5,112	7.9
	絹織物	4,610	7.0	ゴム類	3,255	5.0
	人造繊維	2,702	4.1	化学肥料	2,683	4.2
	計	65,901	100.0	計	64,611	100.0

1960 (昭和 35 年)	電気機器類	47,409	14.7	薬品類	30,280	9.5
	魚介類	39,043	12.1	原油・粗油	22,427	7.0
	衣類	22,610	7.0	採油用子実	22,149	6.9
	鉄鋼	18,785	5.8	小麦	20,185	6.3

	光学機器	15,803	4.9	非鉄金属鉱	19,484	6.1
	計	321,966	100.0	計	319,600	100.0

1970 (昭和45年)	自動車	208,262	12.3	非鉄金属	127,566	10.9
	ラジオ	105,297	6.2	原油・粗油	112,712	9.7
	鉄鋼	90,899	5.4	事務用機器	44,117	3.8
	科学光学機器	90,455	5.3	非鉄金属鉱	40,551	3.5
	テープレコーダー	75,629	4.5	大豆	28,653	2.5
	計	1,691,494	100.0	計	1,165,837	100.0

1980 (昭和55年)	自動車	1,471,596	23.2	原油・粗油	458,369	17.1
	科学光学機器	265,770	4.2	非鉄金属	356,435	13.3
	テープレコーダー	191,238	3.2	石油ガス	109,340	4.1
	ラジオ	178,986	2.8	魚介類	70,923	2.6
	テレビ	175,638	2.8	パルプ	68,463	2.6
	計	6,338,792	100.0	計	2,684,291	100.0

1990 (平成2年)	自動車	973,263	14.6	非鉄金属	508,397	15.9
	事務用機器	485,460	7.3	自動車	349,979	11.0
	映像機器	368,886	5.5	原油・粗油	176,885	5.5
	科学光学機器	292,804	4.4	衣類・付属品	110,240	3.5
	自動車部品	254,762	3.8	石油製品	98,405	3.1
	計	6,667,194	100.0	計	3,187,618	100.0

2000 (平成12年)	自動車	783,338	12.8	非鉄金属	260,564	9.1
	事務用機器	397,033	6.5	原油・粗油	223,367	7.8
	科学光学機器	340,788	5.6	衣類・付属品	215,767	7.6
	自動車部品	340,697	5.6	事務用機器	118,438	4.2
	原動機	229,333	3.8	自動車	113,465	4.0
	計	6,108,719	100.0	計	2,853,460	100.0

2007 (平成19年)	自動車	1,872,181	21.5	非鉄金属	530,649	13.0
	自動車部品	562,130	6.5	原油・粗油	284,927	7.0
	建設用、鉱山用機器	445,068	5.1	天然ガス	224,171	5.5
	原動機	424,492	4.9	衣類・付属品	184,125	4.5
	事務用機器	347,123	4.0	事務用機器	107,529	2.6
	計	8,693,500	100.0	計	4,083,435	100.0

このように常に日本の輸出入の代表的存在であった横浜港は現在でも入港船舶数全国一位、海上出入貨物量・コンテナ取扱個数二位、外国貿易額・総取扱貨物量三位と現在でも重要な存在です。

しかし横浜港も常に順調だったわけではありません。1923年には関東大震災によって壊滅的打撃を受けました。下にあります横浜三塔のうちキングとクイーン、ホテルニューグランド、生糸検査所、山下公園などは震災復興事業によって作られたものです。

また戦争中の1942年(昭和17年)にはドイツ軍艦ウッカーマルクの爆発事故により大被害を受けます。

戦争中には前後30数回もの空襲を受けますが被害は比較的軽かったのです。しかしそれが横浜港に悲劇をもたらします。港湾施設の実に90%以上をアメリカ軍によって接收されてしまったのです。そのため横浜の戦後復興が遅れてしまいました。

横浜は1858年(安政5年)の開港以来、港と共に発展してきた町なので横浜三塔のうちクイーンは横浜税関、ジャックは開港資料館と港に関係した建物であるのもうなずけます。

図2. 横浜三塔(左:神奈川県庁、中:横浜税関、右:開港資料館)



セルロイド玩具

では今度はセルロイド玩具について見ていくことにしましょう。セルロイド玩具の始まりは吹上玉です。1894年(明治27年)5月、前年にセルロイド櫛加工の仕事をした永峰清次郎は外出先で見かけた輸入品の吹上玉を見て、製造を思いついて約半月ほど悪戦苦闘した後、製造に成功します。最初のうちは夜業をしても三人で一日50ダース位だったのが、30ダースとなり、さらに金型で作成するようになると効率が格段に上がりました。

続いて護謨玉、豆人形などが登場します。



図 3. 吹上玉

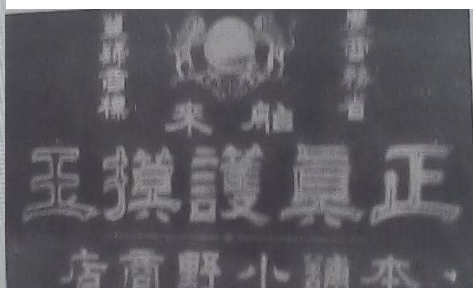


図 4. 護謨玉の看板



図 5. 豆人形

セルロイド玩具輸出は 1898 年(明治 31 年)に中国重慶にあてて吹上玉を 50 ダース輸出したのが始まりで、この頃になると製造開始当時 1 ダース 30 銭だったものが 18 銭になり中国には 25 銭で輸出していました。

では日本は、その後どれくらいの玩具を生産し輸出するようになっていったのでしょうか。

表 4. 日本における玩具の生産と輸出(千円)

年次	輸入	輸出	生産		輸出/生産(%)	
			農商務統計表	工場統計表	農商務統計表	工場統計表
1896 (明治 29年)		308				
1897		246				
1898		243				
1899		280				
1900	78	346				
1901	44	347				
1902	48	386				
1903	45	517				
1904	23	595				
1905	67	600				
1906	71	1,036				
1907	108	953				
1908	83	790				
1909	77	976	3,388		28.8	
1910	130	1,498	1,131		132.5	
1911	93	1,889	1,323		142.8	
1912 (大正	82	1,898	1,534		123.8	

元年)						
1913	98	2,490	1,537		162.0	
1914	73	2,592	1,663	680	155.9	244.6
1915	21	4,533	2,312		196.1	
1916	43	7,640	4,185		182.6	
1917	44	8,410	4,400		191.1	
1918	60	10,190	4,435		229.8	
1919	37	13,001	5,479	5,757	237.3	225.8
1920		21,189	6,048	6,390	350.3	331.6
1921		7,004	5,622	3,720	124.6	188.3
1922		7,414	6,038	3,314	122.8	223.7
1923		7,140	6,039	3,497	118.2	204.2
1924		8,300	7,089	5,510	117.1	150.6
1925		10,789	7,360	5,892	146.6	183.1
1926		10,861		5,959		182.2
1927 (昭和 2年)		10,521		6,110		172.2
1928		11,001		5,862		187.7
1929		13,855		6,107		226.9
1930		11,700		5,962		196.3
1931		9,824		5,742		171.1
1932		15,119		7,850		192.6
1933		26,375		10,850		243.1
1934		15,143		9,857		153.6
1935		19,307		11,936		161.8
1936		20,912		14,054		148.8
1937		25,557		17,973		142.2
1938		15,493		13,733		112.8
1939		14,114		14,550		97.0

このようにかなり浮き沈みが激しかったことが分かります。急上昇したのは、これまでサロン等で何度も言ってきました第一次世界大戦当時の好景気、急降下はその後の不況です。

ところでこの表、何かおかしくありません。玩具の生産金額よりも輸出金額のほうが大きく上回っているのです。また農商務統計表と工場統計表とが大きく異なります。

その理由について語ります前にセルロイド玩具について語られる「第一次大戦の勃発によりヨーロッパが戦場となったために日本に注文が集中して空前の好景気となった。そして戦争の終結とともに反動不況となった」ということに触れるために、もう一つ表を示すことと

いたしましょう。

表 5. イギリス・アメリカの玩具生産と輸入(千ドル)

年次	イギリス				アメリカ			
	生産	輸入	占有率 ドイツ	占有率 日本	生産	輸入	占有率 ドイツ	占有率 日本
1904					5,578	4,977	91.3%	2.2%
1905						4,964	90.9	2.4
1906						5,888	90.9	3.1
1907	4,366	4,874				6,997	89.6	3.7
1908						7,206	90.4	2.5
1909					8,264	4,869	90.5	2.6
1910						6,586	89.7	3.0
1911		6,311	78.0	3.2		7,956	88.9	3.7
1912		6,581	80.8	2.5		7,894	88.4	4.1
1913		7,081	81.5	2.8		7,936	87.0	3.8
1914		3,414	69.2	7.2	13,757	9,084	85.0	4.8
1915		2,552	0.2	31.5		8,085	83.9	5.9
1916		1,871	0.1	46.0		3,217	73.9	15.6
1917		910	0.3	8.2		1,442	1.3	83.6
1918		1,579	0.0	3.4		1,299	10.6	83.3
1919		3,240	12.8	11.4	45,657	2,952	33.3	59.4
1920		9,713	55.8	17.7		10,738	39.5	52.7
1921		7,033	75.7	6.6	35,491	7,107	68.5	17.8
1922		9,767	75.5	8.3		7,554	81.0	7.1
1923		11,454	77.6	7.1	56,066	8,362	88.8	4.2
1924	6,685	10,647	78.1	5.6		5,248	82.5	3.9
1925		12,384	79.8	6.2	55,734	4,058	77.8	6.1
1926		11,975	76.9	8.4		4,396	75.1	8.7
1927		12,807	80.8	6.5	63,956	4,598	75.9	7.5
1928		12,539	83.6	5.2		4,258	74.2	9.5
1929		12,488	83.5	5.2	74,829	5,129	60.3	25.8
1930	10,066	12,931	82.9	6.0		4,242	55.0	31.4
1931		12,594	81.1	7.0	53,601	3,715	57.2	30.9
1932		8,712	77.6	9.9		2,486	59.0	31.7
1933		5,271	62.7	17.1	37,222	1,886	48.9	45.5

1934	12,515	5,984	62.8	25.2		2,428	15.9	77.3
1935	15,521	6,195	56.7	31.0	52,156	2,410	20.5	82.5
1936		7,322	61.9	26.7		2,805	19.6	75.3
1937		7,931	60.4	27.7	63,856	3,174	17.1	79.1
1938		8,670				1,579	28.0	63.9

この二つの表で色々なことが分かります。先ず先ほど述べました生産量よりも上回っているという点です。これは1938年(昭和13年)までの工場統計表から職工が五人未満の小規模作業場を外しているのです。

その五人未満の玩具製作所がどの位の割合だったのかを示しているのが表6です。

表6. 東京府下の玩具規模別生産額・従業員数(1939年)

	金属玩具	金属以外の玩具
生産額(円)	3,412,843	10,185,509
内五人未満(円)	1,024,199	5,607,393
比率	30.0	55.1
従業員数(人)	1,861	5,049
内五人未満(人)	743	3,603
比率	39.9	71.4

図6. セルロイド玩具工場(近所の女性や子供が仕事をしている小規模工場だと分かる)



セルロイド玩具などの工場は図5に示すような小規模なものが多かったことが分かります。こういった工場を入れていないから生産よりも輸出が大きく上回るという事態になるのです。これに対して小規模工場も組み込んだ1939年(昭和14年)の数字は97.0%となっています。

さらにその頃の玩具はブリキなどの金属、陶磁器、ゴム、セルロイド、木、紙、その他に

分類されていたのですがゴム、セルロイドの新しいタイプの玩具は十分に組み入れられていませんでした。

この二点が原因となって生産額よりも輸出金額のほうが多いという逆転現象が起きているわけです。

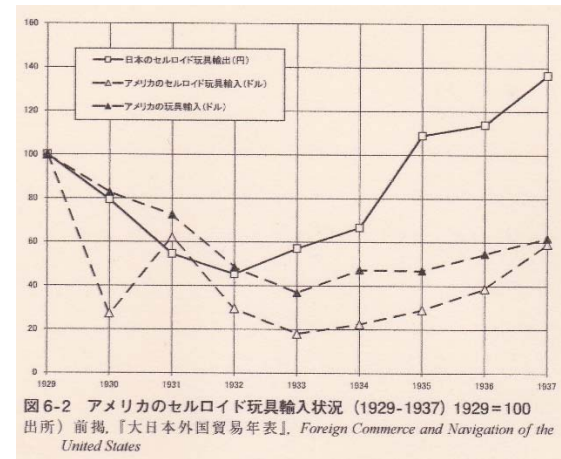
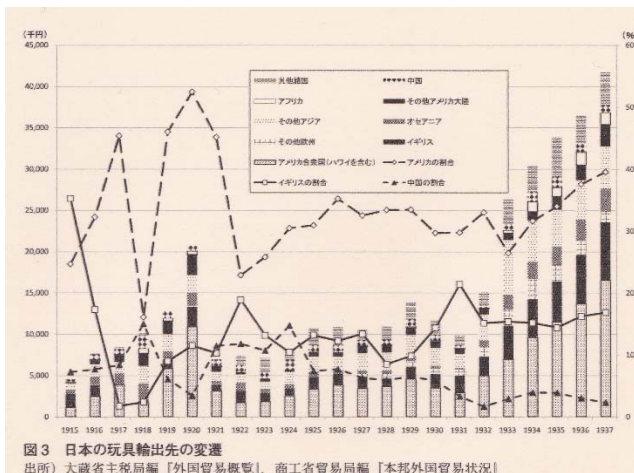
そして今一つの「第一次大戦の勃発によりドイツから日本に注文が集中した。そして戦争の終結とともに反動不況となった」という点ですが、第一次大戦が勃発する前年の1913年(大正2年)に81.5%だった、イギリスにおけるドイツ輸入占有率が戦争中には一気に0%台にまで急落しています。それに対して日本は5%もなかったものが一時は46%にまで上がっています。アメリカが参戦したのは1917年(大正6年)ですが、その年にドイツ輸入占有率が一気に1.3%へととなっているのに対して日本は83.6%となっています。

戦後の落ち込みのほうですが1921年(大正10年)のイギリスにおける日本輸入占有率6.6%、アメリカ17.8%といった数字から如何に落ち込みが激しかったかが分かります。

次に日本の玩具輸出先の変遷とアメリカのセルロイド玩具輸入状況を見てみましょう。

図7. 日本の玩具輸出先の変遷

図8. アメリカの玩具輸入状況



点線で示すアメリカの割合が凄いですね。でも1918年(大正7年)に急落していますが、これはアメリカが玩具輸入を禁止したからです。実線のイギリスも同じようなことをやっていて1916年(大正5年)に玩具輸入を禁止しています。それまでのイギリスは北米やオーストラリア向け玩具の経由地となっていました。しかしこの措置から以後は直接輸出入を行うようになりました。

このように戦前期において日本の玩具は数多く輸出されて大いに外貨を稼ぎましたが、閉ざされる時を迎えます。言うまでもなく第二次世界大戦です。

金属玩具は製造中止、続いてセルロイド玩具も軍用を除いて中止となり、紙製の手毬、木製の軍艦、竹製の装甲車といった笑えない珍玩具が登場し遂には敗戦となったのでした。

図 9. 紙製の手毬、木製の軍艦、竹製の装甲車



戦争の終結とともに玩具業界も復興しました。セルロイド玩具も戦前以上の復興を見せ、盛んに輸出されます。その頃、アメリカ兵がお土産としてこぞって買い求めたのが、石膏を芯としたセルロイドの置物です。またパープー人形は年に70~80万個も輸出されるという大ヒット商品となりました。

図 10. 置物

図 11. パープー人形(猿や少女に羽をつけて紐で吊るす)



しかし塩化ビニールなどの各種プラスチックの登場によりセルロイド玩具は次第に姿を消して行って、現在では殆ど見かけることが無くなりました。

で、このような玩具類はどこから輸出されたのでしょうか。詳しい数字は分かりませんがかなりの割合で横浜港から輸出されたと推定されます。といいますのが玩具製造は東京地区が圧倒的だったからです。特にセルロイド玩具は工場の九割が集中していました。製造個数も九割ではないでしょうが、七~八割はあったと思われます。

このように横浜港と玩具、特にセルロイド玩具は切っても切れない関係だったのです。

主要参考資料:

日本セルロイド商工大観、1930年

日本プラスチック工業史、1967年、小山寿、工業調査会

THE DOLL、1978年、セキグチ

硝化綿工業会 40年史、1998年、硝化綿工業会

CELLULOID、1999年、KEITH LAUER & JULIE ROBINSON、COLLECTOR BOOKS

戦間期日本の中小工場と国際市場、2013年、谷本雅之

横浜開港と生糸貿易

神奈川県史

横浜市史

開港資料館ホームページ

横浜税関ホームページ